

知覚機能別の情報量で、視覚は83%という報告がある。視覚障害は情報障害を意味しており、いかに情報を補償するかによって視覚障害者の社会復帰や適応が左右されることになる。それは、点字の発明、機器の普及による社会参加等々、歴史が物語っている。しかし、視能訓練士が情報機器を直接訓練することは少ないだろうが、これらの情報機器がどのように活用され、ロービジョンの人々が社会の中で活躍しているのかを知ることが、ロービジョンの人々と臨床で遭遇する視能訓練士にとって大切である。なぜなら、ロービジョンの人々がいかに家庭・職場・学校で活躍するのかを知らずして、ロービジョンリハビリテーションのスタートを切ることができないからである。

ロービジョンの人々がPCを操作する際、どんな工夫があるだろうか。主には画面を拡大する方法（視覚支援）、音声でガイドする方法（視覚代替）のアプローチがある。画面を拡大するには、画面の解像度を下げて拡大する方法と「拡大鏡」(Windows)、「ズーム機能」(Mac)などを利用して画面の一部または全てを拡大する方法とがある。この2つの方法は無料である。「ZoomText」(アメディア)という有料のWindows用ソフトを利用すると、マウスポインタの巨大化、2画面を利用した拡大など、より多機能な拡大を行うことができる。ロービジョンの状態ではPCを操作する際、その重症度に応じて音声を取り入れることで効率的に作業ができる。例えば文字の入力中、視線は資料を追っていて、入力の結果を音声でフィードバックさせると、視線の移動回数が低減でき、効率的なPC操作が可能となる。Windowsで一般的に利用される音声ソフトは「PC-Talker」(高知システム開発)やNVDA(無料)、Macでは、VoiceOver(OS標準機能)を利用できる。また、視覚障害者がPCを操作するときに通じていえることは、タッチタイピング(キーボードを見ないでキーボード入力すること)で、文字入力はもとより、上書き保存や範囲選択・コピー・ペースト等の様々な機能のショートカットキーをマスターすることである。マウスを用いた操作が中心であったり、キーボードを見ながら入力していたりするのは、作業効率は向上しない。

タブレットも最近は大きな役割を担う。遠用・近用の視覚補助具として利用したり、写真を撮影して記録も兼ねて利用したり、大きな画面に電卓・タイマー・書籍等々を表示して利用したりなど様々な利用が可能である。

ロービジョンの人々が障害者とならないように社会が環境を調整することは欠かせないが、一方で、障害者とならないような装備をしていくことも必要である。